氏　　名	藤田　知幸
授与した学位	博　士
専攻分野の名称	看護学
学位授与番号	博甲第１１６号
学位授与の日付	平成３０年３月２３日
学位論文の題目	ICU survivors のせん妄と ICU 入室体験に関する研究
学位審査委員会	主査　高橋徹　副査　山口三重子　副査　荻野哲也 副査　伊東秀之　副査　中村孝文

学位論文内容の要旨

本学位論文は、集中治療で問題になっているせん妄に焦点をあて、ICU survivors のせん妄と ICU 入室体験との関係を検討した実態調査研究である。

集中治療看護の目的は、生命を脅かすような健康問題に対する反応を見極め、好ましくない影響を緩和するとともに回復を促進し、生活の質（quality of life, QOL）の維持と向上を図ることである。近年の集中治療の進歩により生存退院できる患者（ICU survivors）は増える一方で、集中治療後の身体、精神、認知機能障害によって、退院後の QOL は低下した患者の存在が報告されている。例えば、救命され自宅退院できたとしても身の回りのことができなくなった、長期入院生活の間に抑うつ傾向になり自宅に引き籠もるようになったという状況である。2014 年に日本集中治療医学会は、集中治療患者のアウトカム改善のために「日本版・集中治療室における成人重症患者に対する痛み・不穏・せん妄管理のための臨床ガイドライン」を作成し、医療スタッフが協同で痛み・不穏・せん妄管理に取り組むことを推奨している。このガイドラインのなかではせん妄に関する項目が最も多く、近年の集中治療において、せん妄の重要性は高まってきていると言える。その理由として、せん妄発症によって、ICU 在室日数や在院日数の延長だけでなく、退院後の QOL や精神状態の低下を招くことが明らかになってきているからである。

序章では、ICU 入室患者のせん妄と入室体験に関する研究動向について述べた。せん妄は活動型別に発症例の症状と医療者の対応が大きく違ってくる。しかし、せん妄の活動型別に要因や患者の思いの違いを報告した文献は少なく、検討が必要であると考えた。看護は患者を理解し信頼関係を築くことから始めるが、ICU 在室中にせん妄患者が何を不快に思い悩んでいるのかについては、あまり知られていない。ICU 入室体験のなかでも好ましくないとされるせん妄や妄想的記憶に着目し、臨床から実態を報告することに意義があると考えた。

まず第 2 章では、ICU survivors のせん妄の活動型別発症要因と ICU 体験との関係を明らかにすることを目的に検討した。その結果、せん妄発症要因は、低活動型せん妄では高

齢、混合型せん妄では敗血症の併発と脳神経系疾患であり、相違していた。また、せん妄発症による ICU 在室日数、人工呼吸管理時間への影響はなかった。さらに、混合型せん妄発症例で記憶の欠落、妄想的記憶、身体抑制、意思疎通困難、孤独感など、他のせん妄発症例や非せん妄発症例と比べて不快感の強いことが明らかになった。これらの結果には、既存の報告と類似するものと相違するもの双方ある。このような実態調査を積み重ねることで、ICU 入室したせん妄患者への理解が深まると考える。

さらに第 3 章では、ICU survivors の妄想的記憶と退院後の精神的問題との関係を明らかにすることを目的に検討した。その結果、妄想的記憶の保有率は 37%、保有要因は、意識レベルが良いこと、せん妄発症のないこと、重度の酸素化障害があることであった。また、妄想的記憶の不快さと被害妄想、せん妄発症、混合型せん妄発症との関係が明らかになった。退院半年後の精神状態に妄想的記憶は関係しなかったが、被害妄想は影響する可能性を認めた。これらの結果から、ICU 入室患者の妄想的記憶は特別な現象ではないが、被害妄想には精神的支援の必要性が示唆された。

本研究の研究的意義は、在院中の ICU survivors 150 例から ICU 入室体験を面談調査し、実態を明らかにできたことである。個人情報保護と倫理的配慮の観点から、とりわけ日本では、臨床において患者本人からありのままに体験を拾い上げることは難しい。本研究では、せん妄の活動型特徴と ICU 入室体験を量的に調査するとともに、妄想的記憶を質的に検討することができた。

これまでの報告では、低活動型せん妄発症例と不良な予後との関係に着目されることが多かったが、本研究では、混合型せん妄発症例での不快な体験や記憶の欠落を明らかにすることによって、ICU におけるせん妄患者の理解に一助を投じたと考える。また、混合型せん妄発症例や被害妄想保有例では不快感の強いことから、より精神的安寧をはかる必要性が示唆された。

本研究は、ICU survivors のせん妄と ICU 入室体験に関する退院後の精神状態に留まっている。しかし近年、退院後の QOL は低下した患者の存在が報告され着目されている。ICU survivors の精神状態だけでなく、QOL や日常生活全般に向けた評価と検討が必要であると考える。

主業績

No.1	
論文題目	人工呼吸管理を受けたICU入室患者のせん妄の活動型発症状況と記憶についての検討
著者名	藤田知幸、高橋徹
発表誌名	ICU と CCU, 41(9), 573-79, 2017

副業績

No.1	
論文題目	ICU入室患者の妄想的記憶と退院後の精神状態についての検討
著者名	藤田知幸、高橋徹
発表誌名	岡山県立大学保健福祉学部紀要，23(1)，13-20，2016

論文審査結果の要旨

集中治療の進歩により生存退院できる患者（ICU survivors）は増える一方で、集中治療後の身体、精神、認知機能障害によって、退院後の QOL は低下した患者の存在が報告されている。ICU survivors の QOL 低下の要因において未だ一致した見解はないが、重症度だけでなく ICU でのせん妄発症や入室体験が指摘されている。本学位論文は、近年、集中治療で問題になっているせん妄に焦点をあて、1）ICU survivors のせん妄と ICU 入室体験との関係、2）ICU 入室体験のなかでも好ましくないとされる妄想的記憶と退院半年後の精神状態を検討した実態調査研究である。

まず、第一の課題として、の活動型別発症要因と ICU 体験との関係を検討した結果、せん妄発症要因は、低活動型せん妄では高齢、混合型せん妄では敗血症の併発と脳神経系疾患であり、せん妄の活動型別で相違していたが、せん妄発症には直接的または二次的な脳機能障害による影響が示唆された。また、混合型せん妄発症例で記憶の欠落や ICU 入室体験に不快感が強いことが明らかになった。

第二の課題では、妄想的記憶の保持要因として、意識レベルが良いこと、せん妄発症のないこと、重度の酸素化障害があること、また、妄想的記憶の不快さと被害妄想、せん妄発症、混合型せん妄発症との関係が明らかになった。妄想的記憶と退院半年後の精神状態は関係しなかったが、妄想的記憶のなかの被害妄想の保持と退院半年後の精神状態の低下の関係性に可能性を認めた。

本研究の ICU survivors 150 例の実態調査によって、混合型せん妄発症例での不快な体験の記憶から、せん妄患者を認識力が低いと捉えるのでなく、より信頼と安心を必要としている存在と理解するべきという、医療従事者の ICU におけるせん妄患者の認識に一助を投じたと考える。また、妄想的記憶が被害妄想の場合には、患者の不快は強く、退院後の精神状態に影響する可能性が推測されるため、精神的支援の必要性が示唆された。

これらのことから、本論文における一連の研究成果は、ICU survivors のせん妄と妄想的記憶の理解を深めるために新しい知見を提供するもので、看護学分野の研究と実践に対して有意義なものと判断された。また、予備審査論文発表会・公聴会では適切で明快な発表がなされ、質疑応答においても的確な応答が行われたことから、当該分野における十分な専門的知識、および研究能力を有していると判断された。以上の結果より、学術上、実際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（看護学）の学位論文として価値あるものと認める。